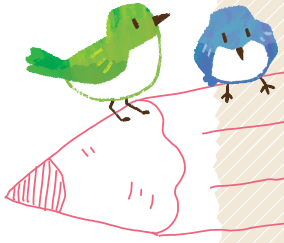


会長賞

中学生の部



「当たり前じゃない」「おはよう」の
先にあるもの」

西宮市立大社中学校
2年 柴田^{しばた} 奏海^{かなみ}さん

私は、脊髄性筋萎縮症という病気で、生まれてからずっと自分の足で歩くことができません。毎日、電動車いすに乗って、教室から体育館へ、図書室から理科室へと、車いすとともに移動しています。私にとって、学校の廊下やスロープ、エレベーターは、まさに、「命綱」です。もしこれらがなければ、私は自由に学校生活を送ることができません。物理的なバリアフリーは、私にとって、とても大切なものです。

しかし、学校生活を送る中で、私はもう一つの、じろと見られることもあります。そいつは、私は「見えないバリア」の存在を感じ心がとても痛くなります。そんな時でも、友達や先生は、温かい言葉をかけてくれたり、私のありのままを受け入れてくれます。それらは、私を前向きな気持ちにさせてくれます。

私の当たり前じゃない「おはよう」の先には、いつも誰かの優しさがあります。それは、困っている私に差し伸べられる手だったり、気遣いの言葉だったり、あるいはただ、私を特別扱いたるのではなく、一人のクラスメイトとして接してくれることだったりします。これらの小さな一つ一つが、私にとっての、「当たり前」をより豊かなものにしてしてくれます。

私は、この経験を通して、誰もが安心して、自分らしくいられる社会を目指すためには、まず私たち一人ひとりが、お互いを理解し、思いやる心を持つことが大切だと思っています。物理的なバリアフリーの整備はもちろん重要ですが、それ以上に、心のバリアフリーを育むことが、インクルーシブ

そしてもっと大切な「バリアフリー」があることに気づきました。それは、目には見えない「心のバリアフリー」です。

朝、登校して教室に向かう時、混雑した廊下で立ち往生してしまうことがあります。そんな時、誰かが「大丈夫？」「開けるよ」と声をかけ、ドアを開けてくれたり、机をどけて道を作ってくれたりします。体育の授業でグラウンドに出る時、友達が自然に車いすの横に並んで歩いてくれたり、少しの段差でも「気をつけてね」と声をかけてくれたりします。授業中、先生が私の目線に合わせてかかんで話してくださいることもあります。これらの何気ない優しさや配慮は、私にとってどれほど心強く、日常を豊かにしてくれることか。それは、段差をなくすことと同じくらい、いや、それ以上に大切なことだと、私は感じています。物理的なバリアフリーが私の体を支えてくれるなら、心のバリアフリーは私の心を支え、安心して学校生活を送るための大きな力になっています。

もちろん、時には傷つく言葉を言われたり、じろな社会への第一歩なのです。

私の当たり前じゃない「おはよう」の先には、これからも多くの「優しさ」と「配慮」に支えられながら、未来が続いていきます。そして、私もまた、誰かの「当たり前じゃない」に気づき、優しさを与えられる人になりたいと思っています。

